

ボランティア情報



No.416

【ボランティア情報】
昭和52年11月12日
第三種郵便物認可
平成24年1月1日発行
毎月1回1日発行

座談会 NPOと社協・地域の ボランティア

見えていますか？ 地域の「お宝」

社 会課題が多様化・複雑化するなか、課題解決のために連携が
必要な場面は一層増えてきている。

特に社協や社協と関係の深い地域のボランティアは、NPO 法人等
と「もっと連携が必要」と言われることが多いが、地域や分野によっ
ては、容易には連携が進みにくい場合も少なくない。

今月号の特集では、NPO、社協の両方の関係者を招いて座談会を
開催し、連携のために求められることについて議論を深めた。



january

Contents

特集	座談会 NPOと社協・地域のボランティア 見えていますか？ 地域の「お宝」…	2
	ボランティアの力でつながる日本～被災地の今と今後をみる～（宮城県気仙沼市 渡辺 耕良さん）……………	6
イベント助成金情報	第26回住民参加型在宅福祉サービス全国研究セミナー 「生活支援サービス実施・推進団体 リーダー的人材養成研修会」開催 （全国社会福祉協議会／全国ボランティア・市民活動振興センター）……………	6
	ボランティア国際年+10 ボランティア Around the World（インド共和国）／つながって広げよう！……………	7
	保険の広場／CLIP BOARD／事務局だより……………	8

特集

NPO 座談会 と社協・地域のボランティア

見えていますか？ 地域の「お宝」

出席者

さかくち かずたか
坂口 和隆 さん



認定特定非営利活動法人
日本NPOセンター 事務局長
全社協・全国ボランティア・
市民活動振興センター運営委員

全国のNPOの基盤整備と、行政や企業との連携・協働を促進するための事業や震災の復興支援事業を展開。傍ら、地元では社協が受託をしているNPO支援センターの運営にかかわるとともに、児童館や学童クラブを運営するNPOで活動している。

いわつき ゆか
岩附 由香 さん



認定特定非営利活動法人
ACE (エース) 代表
全社協・全国ボランティア・
市民活動振興センター広報委員

学生時代の平成9(1997)年にACEを立ち上げ、児童労働の問題に取り組む。インドとガーナで子どもを支援するプロジェクトを推進するとともに、日本国内の企業や政府に対する啓発活動や政策提言を行っている。東日本大震災では、宮城県山元町災害ボランティアセンターの運営支援にかかわる。

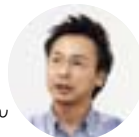
いのまた けんいち
猪俣 健一 さん



社会福祉法人
阪南市社会福祉協議会
コミュニティワーカー・
ボランティアコーディネーター

学生時代にネットワーク型のボランティアグループを立ち上げて活動した経験から、ボランティアを応援する立場としての仕事を希望し、平成16(2004)年に社協に入職。ボランティアコーディネーターと地域支援の二つの役割を担い、地域の課題解決に向けた取り組みを展開中。

ちがはら きみひこ
千川原 公彦 さん



特定非営利活動法人
ディー・コレクティブ
代表

平成15(2003)年にディー・コレクティブを立ち上げ、社協や市町村行政と協働・連携して、被災地支援や防災の取り組みをすすめる。山形県市民活動支援センターの運営団体である特定非営利活動法人「山形の公益活動を応援する会・アミル」の役員も務める。東日本大震災では、南三陸町、気仙沼市、塩釜市への支援にかかわる。

※ NPO は最狭義には特定非営利活動法人 (NPO 法人) を指しますが、広義には、ボランティアグループや社会福祉法人など、さまざまな非営利団体を指します。本稿では、NPO 法人や法人格は取得してなくとも、社協とは別個に自立的に活動を展開している市民活動団体 (NGO 含む) などを指します。

NPO は社協のことをどうみているか

地域や分野によってさまざま

坂口 NPOと社協との関係は、都市部とそれ以外の地域とでは異なる部分があると思います。また、福祉系のNPOにとって社協は非常に身近な存在であり、場合によってはライバルです。

福祉分野以外のNPOにとって社協

は少し遠い存在です。社協が中間支援やNPOとの接点をもつような事業をやっていない場合は、ボランティア保険の受付窓口、あるいは、ボランティアコーディネーションでお世話になっている団体、というイメージが強いのと思います。また、行政出身者が事務局に多いことなどから、本来は民間の社会福祉法人なのですが、行政に近い存在だと考えているNPOもまだ多いと思います。

また、全国で300ほどあるNPOの中間支援センターのうち、20余は社協が受託・運営しており、NPOも対象とした中間支援機能をもつ社協は増えてきていると思います。

無理解・誤解から摩擦が

千川原 今回の震災でいくつかの社協に入りましたが、初めは非常に警戒されました。それまでに来た外部の支援者から口々に一方的なアドバイスや提



案をされ続けていたため、仕方のないことと思います。私の場合、その後長い時間をかけ、丁寧にかかわることでどうにか信頼していただけるようになりました。

NPOの仲間には「社協とは何か」が分かっていない人が少なくありません。そうした無理解や誤解から、「NPOは勝手なことをする」、「社協は動きが重たい」といった摩擦が生まれているように感じています。

誤解や摩擦が生じた場合は、その都度話し合っ、緊張状態にある被災地の社協に安心してもらうようなアプローチをNPO側が取ることが必要だと思っています。

もともとの成り立ちに違い

岩附 NPOは特定の意図やテーマがあって活動しています。一方、社協は、その地域全体をみて、地域に根ざして活動します。NPOと社協の誤解や摩擦には、そうしたお互いのもともとの成り立ち、存在の仕方の違いを理解できていないところからくるものが多いのではないかと感じました。

運営の仕方についても、社協は行政の影響をすごく受ける場所に難しさがあると思いました。理事会等の仕組みはNPOと似ていますが、私の印象では、自分たちの思い通りにできるという意味で、NPOの方が運営はしやすいと感じます。

多様で、ひとくりにできない「社協」

猪俣 「社協とは何か」が見えにくい、分かりにくいとよく言われますが、「社協」という名前は一緒でも、地域ごとに課題は異なるので、取り組みも違っ

て当然です。「社協」とは、もともと一つにくりにくいものなのです。

例えば、地域によっては、民間の採算性では担いにくい介護の問題に対応する必要があったり、ボランティアやNPO等の活動ではなく、本当の地縁の支え合いで成り立っている地域もあります。災害時に支援に入るときなどには、同じ社協であっても、そうした地域の特性をきちんと理解したうえでかかわっていかないと、結局、現場から拒否されてしまいます。

地域の人は、地域を愛しすぎるがゆえに、自分たちが見てきた地域だけを地域としてとらえていて、外部の人が入ると、自分たちが思っている良い地域が壊されるという恐怖感をもっていることが多いと思います。社協職員が専門職として、そうした地域住民やNPO等をきちんととらえ、つなげる視点をもつことが非常に重要です。

連携に必要なこととは？

お互いの強みで補い合う

坂口 NPOは基本的にはあまり制度には縛られず、自分たちが取り組みたいことを選んで実施できますが、社協では制度上どうしてもやらざるを得ない場合があることを、NPO側は理解しないといけないと思います。

岩附 社協の本来のコンセプトは市民中心の福祉だと思いますが、制度的にやらなければならないことがあるなかで、それを考えていくのは大変なことだと感じました。

猪俣 社協は「住民主体」ということを、昭和の初期からずっと貫き通して、地域の人と地域を良くしていくためにコミュニティワークをしていますので、地元の人と一緒に話し合うとか、地域の課題に注力するというノウハウは、本来は社協にあるものです。

岩附 社協に入ってくる地域の情報量

は非常に多いと思います。地域とのつながりの強さは、NPOではもち得ない宝だという気がしますね。

猪俣 ただ、社協には、広報やマネジメントのノウハウが少なかったり、企画立案の力が弱かったりすることがあるので、NPOとお互いが強みとしていることを補い合う形でできることはあると思います。

坂口 日本NPOセンターでは、広告を専門とする企業とNPO関係者が協働して、NPOをはじめとする民間非営利組織の広報力を向上させるセミナーを行っています。社協からの参加者が非常に増えています。

同じ民間の非営利組織なので、分野にこだわらず、こうしたマネジメントの課題などで、社協とNPOがいろいろな課題を共有したり、解決策を導き出すために、同じ場で議論をすることはできると思います。

ガラリーと雰囲気が変わった瞬間

猪俣 阪南市では、NPOと地縁の各種団体やボランティアなどをつくっている校区福祉委員会と一緒に、「ボランティア・市民活動検討委員会」を設けて2年間議論しました。

その委員会でも、最初の1年間は、校区福祉委員会のボランティアからは「私たちは無償のボランティアだが、NPOは金儲けをやっている」、NPOからは「閉鎖的で、自分たちの課題をちゃんと分かっていない」といったお互いの誤解や認識不足があり、感情論になってしまいました。

ところが、あるときから、ガラリーと雰囲気が変わって、非常に友好的な雰囲気になったのです。ある日、子育て



中の親から相談が寄せられた際に、「自分たちには子育て支援は難しい。子育てだったら、あのNPOの得意分野だから相談しよう」ということになり、校区福祉委員会とNPOとが協働したのです。校区福祉委員会が主催しているお年寄りの茶話会に、子育て中の親子を招いて、一緒にできる遊びをしたのですが、NPOを中心に口コミで広がって、子育て中のお母さんたちがたくさん来てくれ、子どもが楽しんで遊び回り、お年寄りたちも久々に子どもたちと接して大喜びでした。そういう話を伝えることで、みんなが、「連携とはそういうことなのだ」と気づきだしたのです。

「つながる場」と「つなぎ役」を自任する存在が必要

坂口 NPOも地域型のものが現れてきていますので、必ずしもテーマ型とは言いきれないのですが、地域をベースとした活動者とテーマ別のNPO等のお見合いの場など、つながる機会を設定するような役割を自任して果たしていく存在が、地域には絶対に必要だと思います。

猪俣 阪南市には「ボランティア・市民活動交流サロン」というものがあります。これは先ほど言った委員会の参加者から、「この委員会のように地域のさまざまな関係者がつながる場が今後必要だ」という声が上がってつくられたものです。

まずは、地域のなかで、どこがどんな活動をしているのか、その具体的な姿がきちんと見えてくれば、話がつな



「ボランティア・市民活動交流サロン」

がってくるし、そのうえでお互いの必要性があれば連携すればよいわけで、そのための大きなテーブルをつくることに意義を感じています。この交流サロンは、社協とNPOの両者でつくっているため、社協色が強くなくNPO側も参加しやすいですし、社協側も気兼ねなく意見が言えるようになっていきます。

坂口 NPOと社協、行政とNPO、企業とNPOの連携というのは、一つの手段であって、目的ではありません。あくまで課題を真真中に置いて、その課題を解決するためには、どこと組んだらよいかと考えていく必要があります。そして連携が必要になったときに、社協がNPOに、あるいはNPOが社協に声を掛けられるようにすべきだと思います。

そのためには、阪南市のサロンのように、NPOと社協とが日頃からうまくつながる場づくりをすることが必要です。次にそのなかから自発的に、課題別や目的別のネットワークが生まれてくるものだと思います。近くに「お宝」があっても見えていなければ連携できませんので、まずは知り合うことが必要です。

連携し、分担することで広がる活動

猪俣 先ほどご紹介した交流サロンに参加された地域の方は、「私たちはこれまで、自分たちでできる範囲のことしか考えていなかった。こんなに、いろいろな特技をもっている人がいるのなら、もっといろいろなことができます」とおっしゃっていました。

岩附 社協は、災害ボランティアセンターを担うことが多いので、災害時には特にそういう機能が求められますね。そのためには、日頃から、この人とこの人を組み合わせればうまくできるとか、この団体をあの団体に紹介したら後はうまくやってくれるといった、つなぐ発想や力を培っておく必要があります。

猪俣 災害と日常は切っても切れない関係にあり、日頃からそういう発想をしておくことが必要だというのはその通りだと思います。災害時には、外国人の問題や障害者の問題など、あらゆる課題が顕著に現れてきますので、災害時への備えを切り口にする、さまざまなところと連携しやすいと思います。

坂口 最近では、マルチ・ステークホルダー・プロセスという、一つの課題に対して、多様な関係者がそれぞれの知恵を持ち寄って、解決するという手法が注目されています。あらゆる組織の社会的責任の国際規格であるISO26000はそのプロセスを用いて策定されました。各地域レベルでの課題解決にもその手法を用いようという動きも出てきています。

社協 VC に期待されることは？

さまざまな関係者を巻き込む企画

千川原 連携のための場づくりさえしてもらえれば、たぶん、いろいろなNPOが自然につながるだろうと思います。社協の職員は責任感が強く、すべてのことを自分たちでやらねばと思っている方が多いと感じますが、社協のなかで全部を背負ってしまうと、社協自身が辛くなってしまったり、結果的に住民にも支援が届かないということにもなりかねません。

そういう意味では、NPOを課題解決に向けた資源として考えてもらい、地域のNPOにサポートしてもらうことなどを、思いきってお願いしてもらえば、社協も楽になると思います。そのとき、必要になるのは猪俣さんのような企画力のある方だと思います。企画があれば、いろいろな市民、ボランティア、NPOに入ってもらって良い形でも盛り上がるができると思います。

猪俣 実をいえば私自身には企画力は全然ありません。一から私一人で企画を立てているのではなく、地域の声を拾うことにつきますと思っています。現場に行かないと何も答えは出ないし、地域の人がいろいろなヒントをもって、いろいろなところに顔を出すようにしています。そうして、普段からいろいろと聞いているなかで、これを一緒にしたらよいのではと思いついたり、ずいぶん後になって、何か別の案件のヒントにつながるといったことがあるのが地域の面白さですね。常にアンテナを張っておくことが大事かなと思っています。

岩附 普段はどのくらいの頻度で地域を回っているのですか？

猪俣 もちろんさまざまな事務作業があり、その制約のなかで動きますので、一日で地域を全部回れるわけではありませんが、社協というのは、良くも悪くも時間軸が長いので、何かをするにも時間はかかるのですが、1週間、1か月、半年、1年のなかで、少しずつ歩いて聞いてきたことをつなぎ合わせて、3年後にそれが形になるようなことも多いです。

千川原 会議に出るだけではなく、3年後を思い浮かべながら話をしに行くのですか。

猪俣 当然、もどかしいこともたくさんあります。本当はこうだと思っても、全然違う後ろ向きの話が通ったりすることもあります。しかし、それも否定せずに一緒につきあっていくなかで、地域の人たちが自分たちなりに考えたものが出てくるので、安易にこちらから答えを提示するのではなく、辛抱強く会議や地域のいろいろなところに出向きながら一緒につくっていくことを意識しています。

タイミングと歩み寄り

千川原 災害復興支援などでは、支援者は自分が支援に入っている期間内に実績をあげたいという心理に陥りがち



ですが、そこで社協との摩擦が生じやすいですね。

猪俣 社協としては長い時間をかけて地域とつきあっているのです。傍からみたら閉鎖的とか、要領が悪いと思われることも含めて地域であり、僕らはそちら側に立って仕事をしています。そこにポツときて「こうしたらいいのに、何でそんなやり方をしているの」といわれれば当然カチンときます。

ただそこで、社協の側も、「この地域はこういうところで、こういう文化があり、これまでこういう積み重ねをしてきたからこうしている。いきなり一気にそこまではできません。今はそっと見守りながら、機会を見計らって提案していきましょう」といったことをきちんと説明をしてあげないと、感情論だけの喧嘩になってしまいます。直接、地域の人と外部の人が向き合うと、それがまともにぶつかってしまうので、両者のことが分かる人間が間に入って両者をつないでいく必要があります。そのため、社協には地域の視点にどっぷりと漬かりすぎずに、客観的な視点をもっておくことが求められます。

坂口 国際協力系のNGOでも、途上国に支援に入るときは、一つの地域に10年単位でかかわりを持ち、そのなかで、少しずつ人間関係を培いながら、住民の生活向上の努力を見守っていきます。本来、NPOも、そうあるべきなのですが、どうしてもテーマ型だ

と、そのテーマで入っていきこうという意識が強くなります。そういう意味では、NPOは、もう少し地域ベースの考え方を取り込むべきですし、逆に、社協側は、テーマ型の考え方を取り入れていくという歩み寄りが必要かもしれませんね。

自信をもって、もっとPRを！

猪俣 社協は、地域の素晴らしさをきちんと伝えるとともに、社協自身も大事な役割を担っているのだから、それをもっとPRして、地域の人やNPO等に理解してもらいたいと思います。

岩附 そうすれば、かかわる人やボランティアをしたいという人が増えるように思います。

千川原 私は社協に代わる組織はないと思っています。もっと自信をもってPRしてもらえると、若者にも理解してもらえます。例えば、広報が得意なNPOに社協の広報をお願いするとか、いろいろな可能性が考えられますよね。

坂口 社協のなかでも、ボランティア・市民活動センターは、中間支援組織として誰もが来れるところなので、さまざまな方に社協が良い仕事をしていることを分かっていただくための一つの突破口になるのではないのでしょうか。

